



夢は、
浜松で長編映画を作ること、
浜松に美術館を建てること。

——後藤さんが監督・脚本を務めた『ブレイカーズ』には、ご自身の高校時代のエピソードも含まれているのですか。

実は、作品の中に出てくる優等生の女の子は高校時代の私に似せたんです(笑)。私も高校生の頃、「服装検査とかって本質的な学びに関係ないのに何の意味があるんだろう」とって疑問に感じていたけど、それを声に出すことすらできなくてモヤモヤしていた時期が実際にあったので、当時の気持ちを描写しました。

——映画を通して後藤さんが伝えたいかったのは何ですか。

濱田龍臣君が演じた主人公の祐太が「黙ってんなよ、声上げろよ！」と叫ぶシーンがあるんですが、それが一番言いたかったことです。私を含め、今の子どもたちは抵抗しても何も変わらないと思いついてるから、逆に黙ってしまおう。でも、声に出さなきゃ変わるものも変わらないよって伝えたかったんです。

——『ブレイカーズ』には浜松の風景がたくさん出てきますね。浜松を映画の舞台にしたのはなぜですか。

私の亡き祖父は舞阪町(西区)に住んでいて、自分の住む町が大好きだったんです。祖父母の家にはいつも人が集まって、にぎやかで楽しくて、海もきれいで……そんな光景が、私の記憶の中に鮮明に残っています。でも、祖母が入院し、祖父が亡くなってからは、家の中がシーンとして寂しくなっていました。だから、祖父母の家を舞台に映画を撮影することで、もう一度この家にたくさんの方が集まってくれたらうれしいな……と考えたのが大きな理由です。

それに、私の「美波」という名前も、舞阪の海にちなんで名付けられたものなんです。ずっと浜松で生まれ育ったから、浜松が自分の親というか、浜松に育てられたという思いが強いですね。だから浜松で映画を撮れたら楽しいだろうなってずっと思っていました。

——今の高校生たちへメッセージを。

まず、映画をたくさん観てほしいです。その時はつまらないと思ってても、数年後に「あの時の主人公のあのセリフは、こういう意味だったんだ」と気付くことがきっとあると思うから。それと、高校時代って自分の居場所が限定されてしまうから、失敗を恐れてしまうかもしれないけど、高校時代の失敗なんて大したことじゃないから(笑)。「校則変えろ」とか「私にはこういう夢があるんだ」とか、自分の思いをできるだけ声に出してほしいですね。

——後藤さんが映画監督になりたいと思ったのはいつ頃ですか。

子供の頃から美術や芸術に興味があった、東京の大学に進学してからも毎日のようにギャラリーに通っていたんです。大学でも美術史学を勉強していたので、当初は学芸員になろうと思いい、学芸員資格も取得しました。

でも、自分の中学・高校時代を振り返ってみると、美術館ってあまり気軽に行ける場所ではなくて、少し敷居が高かった。じゃあ気軽に自分の世界を広げてくれた場所ってどこだったんだろう……って振り返ったら、「映画館」だったんですよ。

中学・高校時代はお小遣いも限られていたのでなかなか映画を観ることはできなかったけど、毎週映画館に通ってチラシを集めていました。それで、みんなで身近に楽しめる映画を作りたいと思うようになったんです。大学3年生の時には、卒業後はコロナピア大学の大学院に進学して映画のことを学ぼうと決めたので、就職活動はしませんでした。

——卒業後のビジョンはありますか。

今働いている制作会社のインターンと自分の制作活動を、あと1年ほど続けたら帰国する予定です。帰国のことは今すごく悩んでいる最中です。映画監督ってキャリアパス



照明部、製作部、ヘアメイクのクルーたちと一緒にモニターで映像をチェック。脚本がカタチになっていく瞬間だ。



映画『ブレイカーズ』の撮影現場で、同じく浜松出身の俳優、寛利夫さんと。休憩中には地元トークで盛り上がったようだ。



ブレイカーズ

祐太は浜松市内に住む高校生。特定の部活だけを優遇する教師、生徒を縛るだけの無意味な校則、不満はあっても声に出さない生徒たちとの距離感など、歪んだ学校生活を打破しようと、校内で小さなレジスタンスを繰り返していた。ある日、祐太は4人の仲間と共に学年集会の乗っ取り計画を立てるが、果たしてその結末は……。

DATA

監督・脚本：後藤美波

出演：濱田龍臣

萩原利久、志田彩良、芋生悠、須藤蓮

寛利夫 ほか

インターナショナルショートフィルム企画コンペティション

エイベックスデジタルアワード受賞作品(2017年)

dTVにて配信中